

『ひとりよりも ふたりが良い。』

旧約聖書.コヘトの言葉 4章9節

「人はひとりであるよりも、ふたりがよい。」 幼子たちは、「人間関係って難しい」と思っているのでしょうか？大人になるにつれて、人間関係が悩みと感じている人は多い、と感じるのは気のせいでしょうか…。上下の縦関係には、何かと押し付けや反発があるし。では、横関係ならいいか？といえば、比べる気持ちも辛い。「人と関わるのは面倒だから。ひとりがいいな」と思ってみたりするが、それで悩みがなくなるわけでもなくて…。近年、ひきこもり状態にある方々は 100 万人を超えているという、日本の実相に関心を向け、祈り続けています。

2021年8月、佐賀豪雨災害の翌月です。9月の3週目、「罹災証明」が出たというので、佐賀.大町町のAさんのお宅を訪ねました。御年80歳を超えた方です。「もうだめだよ」と、声を震わしながら、気持ちを口にされました。「二年前の一度目は自力でやった。でも二度目は無理。もう何も残っていない。今度は娘んところには頼れん。心が折れたけん。 . . .」
事情を聞けば聞くほど、自力再建の道は行き詰まっていると感じられてくるばかり。こうなってくると、行き着く先には《絶望》が待っているだけかとなってきますから、気持ちの転換が必要になってきます。「にもかかわらず」、《希望》があると考えられるか。人生の岐路に立たされていると感じました。

ここでは他力、つまり、助けをあてにするしか、希望は見出せません。自分は見捨てられし者でなどないと信じられるか。絶望から希望へ。この転換にはどうしても、誰か、隣人の存在が必要になります。被災地で目にした光景は、訪ねてゆく人がいて、自力では開けぬ道が開く！という道すじでした。前回2019年も支援に駆け付けたボランティア.メンバーが、口々にAさんに語り掛けていました。「大丈夫。何とかするけん。一人でやらんと○○さんも△△さんもおる。相談に乗る人がAさんにはついうけん。心配せんでよかよ。」



この言葉かけが、Aさんの心を、「救われた」と転換してゆく瞬間を、私は目撃しました。

今月の言葉は、10節で「倒れれば、ひとりがその友を助け起こす」と続いていました。果たして、何が生きる力の支えになるのか？ひとりの人の危機を支える言葉・救い。まさしく、幼き子どもたちに繰り返し語っている、「あなたと一緒にいてくれる神様」という約束の伝達の大事さと、日頃の寄り添い体験を通して、信じがたきを信じ、望みがたきを望む心の体得が起こる、と思いを強くしました。

(チャブレン 白川道生)